

ひろたまさきさんの仕事をめぐって

The Works of Historian Masaki Hirota

成田 龍一
NARITA RYUICHI

日本女子大学名誉教授
Japan Women's University, Professor Emeritus

キーワード

民衆史 福沢諭吉 差別論 辺境と奈落

Keywords

history of the people; Yukichi Fukuzawa; discrimination studies; periphery and abyss

原稿受理日: 2021.3.1.

Quadrante, No.23 (2021), pp.109–114.

目次

0. はじめに

1. 「民衆史研究」からの出発
2. 「日本近代社会の差別構造」をめぐって
3. むすびにかえて——「パンドラの箱」

0. はじめに

歴史家のひろたまさきさんが、2020年6月17日に亡くなりました。85歳でした。以前から体を悪くされていたのですが、それなりに安定した日々を過ごされており、訃報を聞いたときにはびっくりしました。ひろたさんと私たちのプロジェクトとのかかわりは、岩崎稔さんが述べられているようにずいぶん緊密なもので、1990年代の後半から2000年代の前半にかけて——ちょうど世紀転換期の時期に、東京や京都のほか、アメリカやドイツなど海外も含め、あちこちで研究会や会議を一緒にしました。

とくに、1997年から2000年まで、ひろたさんがキャロル・グラックさん(コロンビア大学)とともに、科学研究費のもとに国際共同研究(「近代日本の社会文化史的研究」)をはじめ

られてからは、日本国内にとどまらず、アメリカを中心とする世界各国の多くの「日本」研究者を巻き込む動きとなりました。「近代日本の社会文化史的研究」の報告書では、「日本における自国史としての日本史とアメリカにおける地域研究としての日本研究という枠組みを、問い直すという作業」を、課題としてかかげています。

今回、グラックさんの呼びかけで、ひろたさんの追悼を兼ねた集まりを持つことができました。新型コロナウイルス禍のもとでZoomによる開催となりましたが、ひろたさんのお仕事を振り返ってみたいと思います。

1. 「民衆史研究」からの出発

ひろたさんの歴史学での仕事は、「民衆史研究」の潮流のなかに位置づけられ、その指導者のひとりとして評価されています。そして、ひろたさんの関心は、(A) 福沢諭吉研究、(B) 民衆思想史・民衆運動史研究、(C) 差別論・差別史へと推移すると、私は理解しています。

順を追ってみたいと思います。まずは



「民衆史研究」についてあらためて述べておけば、戦後日本の歴史学のなかに登場した研究潮流のひとつで、色川大吉『明治精神史』（1964年）がその始まりとされます。色川さんが呼びかけ、その影響を強く受けた研究潮流です。戦後の歴史学の主流は、社会経済史を基層とし、社会構成体の移行を考察する「戦後歴史学」でした。マルクス主義と実証主義に基づき、「階級」によって歴史を分析する「戦後歴史学」に対し、「民衆史研究」は、「階級」という概念に収まりきれない人びとを「民衆」として把握し、「民衆」の主体性を重視した歴史学でした。鹿野政直『資本主義形成期の秩序意識』（1969年）や、安丸良夫『日本の近代化と民衆思想』（1974年）がその代表的な作品とされます（これらの点については、とりあえず、成田龍一『方法としての史学史』（岩波書店〈岩波現代文庫〉、2021年）を参照してください）。

京都大学で安丸さんとともに学んでいたひろたさんも、「民衆史研究」に参画しますが、まずは福沢諭吉を「民衆」の視点から考察するという戦略をとります。(A) 福沢諭吉研究です。近代日本の最大の知識人で、知識人中の知識人である福沢諭吉は「民衆」の対極に位置する存在です。その福沢を、ひろたさんは「啓蒙思想家」として把握し、「民衆」の視点から読み解き、その論理構造の変化を探り、福沢の思想における三つの「転回」を見出します。幕臣から出発した福沢は、「国家独立・富国強兵」の目的は変わらないものの、転回によって「啓蒙期」・「士族期」・「大資本期」と名づけられる時期を持ち、そこでは論理構造——とくに担い手の設定が変わったという議論です（『福沢諭吉研究』1976年）。

『学問のすゝめ』と『時事小言』、あるいは「脱亜論」とのあいだの違いに対し、福沢の思想がずるずると後退したとするのではなく、さりとて（最初から福沢には民衆蔑視があった、とす

る）本質顕現論とも異なる説明を試みます。「民衆」の主体形成との緊張関係のなかで、福沢の主張の推移・転回を読みとっていくのですが、その内面をていねいにたどってみせる点に、ひろたさんの方法がうかがわれます。

とともに、注目すべきは、ひろたさんが「福沢の生み出した近代の輝かしい部分でさえも現代にあっては重々しい桎梏となっていることの意味を、歴史的にあきらかにせんとする」と述べていることです。「近代」を批判的に把握するひろたさん自身の問題意識を、福沢研究に託しながら鮮明に打ち出しています。

(B) 民衆思想史・民衆運動史の問題系も、この問題意識の延長上に提起されます。すなわち、ひろたさんは、「民衆」と言ったとき、それを三層に区分し、それぞれ「豪農」、「底辺民衆」、「奈落と辺境」とします。豪農層は、近代＝文明開化を受容し、鉄道敷設などから利益を得たと述べる一方、その鉄道によって商品経済に巻き込まれ、労働力として各地に運ばれる小作人や都市下層民を「底辺民衆」として取り上げます。自作農もまた、ここに位置づけられます。そして彼らは近代＝文明によって虐げられるため、「文明への反逆」に赴いたといえます。念頭においていたのは、学制反対一揆や徴兵令、地租改正など維新政府の開化政策に反対する「民衆」（農民）たちの一揆ですが、それを文明＝近代批判の文脈で論じました。

その「底辺民衆」のさらに下層に、「奈落と辺境」の人びとを見出す点に、ひろたさんの議論の特徴があります。「奈落」の民として、被差別部落民や「娼婦」を挙げ、「辺境」の民として沖縄の人びとやアイヌをいい、「民衆の三層構造」を見据えます（『文明開化と民衆意識』1980年）。(A) 福沢諭吉研究との関係で言えば、主体を形成し、主体を論じたのは、福沢のような知識人とどまらず、「民衆」も同様に

「文明への反逆」として主体を発露したのだ、という主張になります。ひろたさんにおける、「民衆」という主体の発見、と言えるでしょう。こうした問題意識が、(C)の差別論-差別史へと向かいます。民衆思想史・民衆運動史から差別史へと赴いた点に、ひろたさんの歴史学——「民衆史研究」の特徴があるでしょう。

2. 「日本近代社会の差別構造」をめぐって

「日本近代思想大系」の一冊として刊行された『差別の諸相』(1990年)は、ひろたさんの編集、および解説(「日本近代社会の差別構造」)によって、差別論として画期的な意味をもちました。これまで近代日本の差別といったとき、主要な対象は被差別部落民とされ、江戸時代における身分差別がいまだ払拭されていないと認識されることがもっぱらでした。明治維新という変革が不徹底であり、そのゆえに封建遺制として身分差別が残され、天皇制という同様の封建遺制を持つ「近代日本」の「半封建性」が指摘されてきました。むろん、これとは異なる解釈もありましたが、「戦後歴史学」の主たる見解はかかるものでした。

こうした差別論-差別史に、ひろたさんの議論は真正面から立ち向かっています。いささか性急に述べれば、第一に、多様な差別に目を向け、第二にはそれらが「近代」による差別であることを言い、したがって第三には、日本の「特殊な」差別のありようではなく、近代における差別の文脈で、日本の差別を把握してみせたのです。

ひろたさんは、こうした点を含め「差別」の全体史の研究」を希求します。差別を「強者の弱者に対する扱いということ」を前提としながら原理的には三者の関係を示す概念」とするのは、そのひとつです。甲と乙という二者のあいだでは「対立」となっても「差別」とはされないが、丙が介在することにより差別となる、とし

ます。そのうえで、細かに差別の論理的な説明を試み、まずは集団内差別と社会的差別を区分し、社会的差別もそれぞれは「特殊」であり、「特殊」であるがゆえに、「全体」の差別が機能するようになっているなどの論点を提出します。

他方、差別における属性を、「自然的属性」、「日常的属性」、「社会的属性」、「個人的属性」と分節し、それぞれの「存在形態の特殊性」と差別との関係を解くための仮説とします。ひろたさんが社会的差別を論ずるときに、差別の原因は被差別者の側にあるのではなく、差別する側にあると明言していることは強調しておきたいと思います。「差別」批判のために、差別の歴史的考察を行っていきます。

『差別の諸相』は、近代形成期の日本——1860～80年代の史料を収めますが、「近世」の差別の史料とともに、「アイヌと沖縄人」「被差別部落民」「娼婦」「病者と貧困者」「貧民」「坑夫」「囚人」に関する史料を掲載しています。ひろたさんはここでも、史料をどのような順に並べるかによって「差別」が生じかねないと、慎重に述べています。また、史料としては収められなかったのですが、「女性」「外国人」「芸能人など雑業者たち」「山窩」「離島の人びと」に対する差別の存在にも言及しています。

日本の近世社会を「身分制を基幹とした差別社会であった」と規定したうえで、あらたな「近代社会」における差別の諸相を講じた点に、ひろたさんの議論のもつ大きな意味があると、私は考えています。近代—日本による、あらたな差別が近代の差別にほかならないと論じたのです。近代社会は「人間平等」の理念のもとに出発するがゆえに、「民衆を解放する神々しい光」をもつとともに、「特定の階層」、「特定の人種」、「特定の性」にのみ認められる自由平等と、それらを超えた人類が共有する自由平等との「両義性」を有す

るということが、ひろたさんの主張の眼目です。「近代」における自由平等を、「個別性」と「普遍性」との「両義性」をもつとし、そのことゆえに差別が生ずると論じました。「近代」は差別を解消する方向のみではなく、あらたな差別を生み出したという、差別論における転回が、ひろたさんによってなされました。

解説論文「日本近代社会の差別構造」は、この論点を歴史的に展開し、近世身分制から「一君万民」理念への展開を、身分制の再編の過程として論じます。近代日本の形成は天皇制の創出であり、人間平等は、①「天賦人權」であるとともに、②天皇から与えられたものとして理解された、とひろたさんは説明します。「両義性」が、歴史過程のなかで論じられます。

しかし、ひろたさんの議論の特徴は、さらに近代社会が「文明」と「野蛮」の分割を持ち込み、そこに差別が胚胎したことを論ずる点にあります。近代社会は、人間の欲望を自然的なものとして肯定し、合理的な努力によって欲望を解放することが人間の幸福とし、「近世的な価値観」に「大転換」をもたらしたことを言い、そこからあらたな差別が生じたとするのです。持ち出されるのは、福沢とともに明六社の同人であった西周です。

啓蒙知識人としての西周は、「人世三宝説」(1875年)で、「知」「富有」「健康」の価値を説きます。「近代」によって価値化された徳目であり、あらたな主体の目標となる価値ですが、ひろたさんはこの西の議論を批判的に分析し、「知」は理性／狂気、「富」は富有／貧困、「健康」は健康／病気という二項対立——前項の優位と後項の劣位を作り出すとします。前者による後者の差別を指摘しました。実際に、差別を受けている人びとが後項の状態に陥り、後項の状態にあるがゆえに差別を受けると論じました。

「近代社会」が作り出し人びとが解放される、

まさにそのことによって、「差別」が作り出されるという論理です。従来の(ということは、「戦後歴史学」によって考察されていた)日本における「近代」の不徹底によって「差別」があるとするのではなく、目の前の「差別」は「近代」そのものによって作り出されたと説明しました。「戦後歴史学」の解釈では、西の議論は全面的に評価され、それが人びとにいきわたらないために差別が残存することになりますが、ひろたさんの議論では、西の論理こそが差別を作り出すということになります。

また、多様な差別がそこに現象することも、ひろたさんはあわせ論じています。ひろたさんは、「アイヌと沖縄人」「被差別部落民」「娼婦」「病者と貧困者」「貧民」「坑夫」「囚人」と、それぞれの具体的な様相に即しながら、「近代社会」のなかで、どのような状況が作り出され、差別がたち現れたかをていねいに論じ、歴史の具体的な叙述をおこないます。具体的なありように即し、多くの史料を提示し、帰納的な叙述として近代日本の差別のありようを描きました。

(A) 福沢論吉批判から、(B)「民衆」という主体の発見をへて、(C)「差別」へと問題を昇華するに至ったといえます。「日本近代社会の差別構造」は、歴史認識の点からいったとき、第一には、(繰り返し述べてきたように)これまでの「戦後歴史学」における「日本近代」の「特殊性」論を批判し、「日本近代」も「近代」との普遍的性格を有していることを論じました。日本の「特殊性」にもとづく「差別」ではなく、「近代」のもたらす「差別」が日本にみられるという転回を果たしました。このことは「近代社会独自の差別の性格なり構造なり運動なり」が「現出」という認識をも導き出します。

このことは、第二に、「差別」の概念の転回をも促しました。「近代」において、あらたな主体として登場する「民衆」が、解放と同時に「差

別」の意識をも抱え込むという認識です。主体が抱え込む矛盾として、差別が論じられます。ということは、「差別」を論ずるみずから(=ひろた)の位置を自覚するということでもあります。「差別をつくりだす根源は、差別者たちが正当とする社会秩序や制度であり、その秩序観や人間観にある」という認識は、ひろた自身の内面の自己点検に通じているでしょう。「差別」を語る主体、語る行為にも敏感に意識を配っています。換言すれば、差別を批判的に論ずるために、差別を、仮にせよ前提とするという自己矛盾に敏感であったということです。

このひろたさんの議論——「日本近代社会の差別構造」が1990年に出されたということの意味にも言及しておきましょう。「戦後歴史学」を学び、そしてそれへの違和から出発した「民衆史研究」に参加したひろたさんは、「差別論」—「差別史」を論ずることにより、あらたな地歩を踏み出しました。第三の論点となりますが、(のちに歴史学の「転回」とよばれる)歴史学の認識論的な転回に赴いたと言いうるようになります。こののち、日本では1990年代なかばに展開するカルチュラル・スタディーズに連動する動きを提起した、ということもできるでしょう。

ひろたさんのこの議論は英語圏で読まれ、ひろたさん自身もコロンビア大学やコーネル大学との学術交流に積極的に乗り出し、日本史学が大きく転回をみせることになりました。

3. むすびにかえて——「パンドラの箱」

ひろたさんは、「日本近代社会の差別構造」のあと、(差別論—差別史から)文化交流史の方向に自らの歴史学の対象と課題を定めます。そのためと言ってよいと思いますが、「日本近代社会の差別構造」は、論文集『差別の視線』(1998年)に収められるのですが、同書は副題を「近代日本の意識構造」とし、「文化交流

史とは何か」という論文があわせて収録されました(そのほかは、「「世直し」に見る民衆の世界像」と「明治期における「女のつくられる過程」」)。鋭角的な差別論の主張が、いささか希薄になったような感があります。

また『差別からみる日本の歴史』(2008年)として、「差別」の観点から、古代以来の日本の歴史を描きます。ひろたさんの問題意識としては、通時的な差別史の叙述を必然的な仕事とされ、この書を執筆されたと思う反面、「日本」を一貫したものとして扱い、「日本」を実体化してしまったように感じられます。

このことは、どんどんと転回を推し進めていく歴史学に対するひろたさんの批判—違和感の表明でもあったでしょう。ひろたさんは、「民衆史研究」を大切にされており、差別論—差別史を論じたものの、さらなる転回は「民衆史研究」からの逸脱と考えられたと思います。

ひろたさんにとって、国際共同研究のなかで書き上げられた「パンドラの箱」(酒井直樹編『歴史の描き方Ⅰ ナショナル・ヒストリーを学び捨てる』2006年)は、転回を続ける歴史学への批判として提出されています。「パンドラの箱」は、近代日本の史学史を「民衆史研究」の観点から辿りなおします。

きわめておおざっぱに言えば、近代日本の歴史学は、官学も民間学も、まさに民衆を発見したのであり、その民衆がいかに立派な国民に形成されてきたか、形成されるべきかという視点から、「国民の歴史」を語ろうとしたことにおいて共通している。(「パンドラの箱」)

ひろたさんは、①「民衆を発見した」歴史学の営みを指摘し、その歴史学の営みは、②「民衆」を「国民化」する流れのなかにあったと総括します。戦後のマルクス主義史学(「戦後歴

史学)の「人民」把握にも目を配り、「民衆史研究」に至るまで、歴史学が「国民の歴史」を語ってきたことが記されます。同時に、「民衆史研究」をサバルタン・スタディーズやカルチュラル・スタディーズとならべ、「世界的に共通した問題の発見に参加していた」とも述べます。1970年代後半からの「ポスト・モダニズムと社会史の流行」にも目を向け、その潮流に「近代批判」という論点や「西洋文明の相対化の気運」を見て取ります。

しかし「パンドラの箱」でひろたさんが強調するのは(そうした歴史学の動きの果てに起こる)「そして、「民衆」はいなくなった」という2000年代初頭の状況に他なりません。ひろたさんは、後続の世代の歴史学に「国民国家の形成による民衆の独自性の喪失、またはその異端化」の議論を見出し、国民国家論の影響をみてとります。そして、それを「民衆思想史研究の行き着いた果て」と慨嘆します。

それら〔国民国家論のもとでの歴史学〕の手法の輝かしい魅力は、民衆の独自の思想形成の輝きを犠牲にしたところで得られたものではなかったか。民衆思想史研究の初心に照らせば、それら〔の〕研究は民衆の独自性が失われていく過程を情熱的に論じることにはならなかったか。……民衆は国民となり、その独自の姿を消していくことになるのではないか。(「パンドラの箱」、〔 〕は成田)

ひろたさんは、国民国家論の影響のもとで転回する歴史学に違和感を有し、いまや「民衆の独自性発掘の視座」が「稀薄」になったと批判するのは——「それは、帝国意識にからめとられた日本社会の多数派民衆に対する絶望をも表現するものだったのであろうか」。

ひろたさんは、こうして「民衆」は再生しう

るか」と、あらためて問題を提起しました。「戦後歴史学」に違和感を持ち、「民衆史研究」を展開してきたひろたさんですが、あらたな転回の歴史学にも違和感を示すのです。これまでともに議論をしてきた歴史家に対しての批判であり、安易な同調はありません。その姿勢に、感銘を受けます。「民衆史研究の初心」を大切にするひろたさんとはこの過程で議論をし、その後も議論を続けてきました。

突然ともいえる訃報は、そうした議論の継続を打ち切るもので、無念でなりません。ご冥福をお祈りいたします。